

# 緑の休息

—「書記バートルビー」研究—

藤江啓子

## I

“Bartleby, the Scrivener. A Story of Wall-Street”はその副題が示す通り、アメリカのビジネスの中心ウォール街の物語であり、また壁の町の物語でもある。ウォール街で法律事務所を営む語り手の事務所は事実2つの壁に挟まれ、その色は一方は白、他方は黒であり、次のように描かれている。

My chambers were up stairs at No. —Wall-Street. At one end they looked upon the white wall of the interior of a spacious sky-light shaft, penetrating the building from top to bottom. This view might have been considered rather tame than otherwise, deficient in what landscape painters call “life”. But if so, the view from the other end of my chambers offered, at least, a contrast, if nothing more. In that direction my windows commanded an unobstructed view of a lofty brick wall, black by age and everlasting shade; which wall required no spy-glass to bring out its lurking beauties, but for the benefit of all near-sighted spectators, was pushed up to within ten feet of my window panes.<sup>1)</sup>

シンボルを読み込み過ぎる危険性はあるとしても、語り手の事務所が白と黒の壁に挟まれたグレーゾーン、一種の中間地帯にあることには違いない。作者

Melville が白と黒，光と闇の両方に興味を持ち，むしろ，その相互作用によって出来る黎明に最も心を惹かれていたことが，彼の Hawthorne の芸術に対する次のような見解からも明らかである。

For spite of all the Indian-summer sunlight on the hither side of Hawthorne's soul, the other side — like the dark half of the physical sphere — is shrouded in a blackness, ten times black. But this darkness but gives more effect to the ever-moving dawn, that forever advances through it, and circumnavigates his world.<sup>2)</sup>

Melville 研究の第一人者 John Bryant も彼の編著，*Melville's Evermoving Dawn* にそのタイトルを与えた理由として，ここにこそ Melville 文学の本質があるからだとして次のように述べている。

The image, drawn from Melville's fulsome review of Hawthorne's *Mosses from an Old Manse*, was conceived to body forth the marginal and liminal condition of Hawthorne's art. It is neither complete darkness nor complete sunlight, but that in-between state of mind always moving out of despair and toward redemption, always giving “equal eye” to the diverse topography of our existence. Somewhere on earth and at all times there is this condition of dawn; and in its ever-western movement it circumnavigates the globe touching all cultures. In speaking of Hawthorne, Melville was in fact speaking of himself. For him, that evermoving crescent moment was the essence of art. It is, as well, the essence of Melville.<sup>3)</sup>

もし，このリミナルなグレーゾーンに Melville 文学の本質があるとするならば，“Bartleby”はこのグレーゾーンで起こった典型的な Melville の作品と言

うことが出来る。David Reynoldsはこの物語をConventionalなイメージとSubversiveなイメージの融合であり、道徳的に中立な灰色の中間地帯であると捉え、次のように結論づけている。

Melville brings together Conventional images (piety, prudence, charity, method) and Subversive ones (the likable criminal, urban dehumanization, the grim Tombs) to show how they blend into each other and form a gray middle ground of valuelessness and moral neutrality.<sup>4)</sup>

この物語が基本的に裕福な資本家である語り手と貧しい雇われ人Bartlebyの対立構造を持っていることは確かであるが、そこにJohn Bryantの言葉を借りるならば、“equal eye”の目配りをしながらいかにMelvilleが中間地帯を築き上げ、それが彼の言うラディカルなデモクラシー、“ruthless democracy”といかにかかわりを見せたかを考察するのが本稿のねらいである。また、このグレイゾーンが実際のシンボリズムでは緑という色彩であらわされていることにも注目するものである。

## II

さて、ウォール街で法律事務所を営む語り手は、“the easiest way of life” (p.14)を最良と考える野望を持たぬ法律家であり、ビジネスマンである。さらに彼の特質は次のように述べられている。

... in the cool tranquillity of a snug retreat, do a snug business among rich men's bonds and mortgages and title-deeds. All who know me, consider me an eminently *safe* man. The late John Jacob Astor, a personage little given to poetic enthusiasm, had no hesitation in pronouncing my first grand point to be prudence; my next, method. (p.14)

John Jacob Astor は毛皮貿易によって富を蓄積したアメリカの資本家である。

“prudence” は Adam Smith が、資本主義社会における人間の本性と社会的生産力の構造を解明するにあたって、私的利益の追求における利己的行動の基礎にある人間の本性としてあげたものである。例えば、アダム・スミスは *The Wealth of Nations* において次のように述べている。

This frugality and good conduct [prudence], however, is upon most occasions, it appears from experience, sufficient to compensate, not only the private prodigality and misconduct of individuals, but the public extravagance of government.<sup>63)</sup>

“prudence” や “frugality” といった善行・美德が資本主義社会下における人間の利己的な私的利益追求の行動パターンの裏にあると考える彼の倫理は、プロテスタンティズムの倫理が資本主義の精神と一致すると考えた Max Weber の論理と相通じるものがあり、いずれも、聖と俗、美德と悪徳、善と悪といった矛盾を一致させ、便宜主義的で安全な人間をつくり出す。

2つ目の語り手の特徴，“method” は、Edgar Allan Poe が、“I am a business man. I am a methodical man. Method is the thing, after all.”<sup>64)</sup>と始まり、あらゆる手練手管をもちいて、最後は経済的に成功する実業家を皮肉を持って描いた作品 “The Business Man” を思い出させる。また、Poe は、“Diddling Considered as One of the Exact Sciences” においても、詐欺をはたらきながら成功する “man of business” の特徴を “methodical”<sup>65)</sup>と捉えている。いずれにしても、ビジネスを営むにあたっての便宜のよい特質である。

さて、語り手は、バトルビーに対してこの “prudence” を持って接する。彼はバトルビーを即座に解雇しないことを “prudence” であると考え (p.31)、また後には、どうしても事務所を立ち退かないバトルビーに対しての怒りを

抑制することを“prudent”であると考え (p.36)。ColtがAdamsを不幸にも殺したのは，“imprudently”にも彼の怒りを感情のまかせのままに爆発させてしまったからだと考え (p.36)，ついに，バートルビーに対する怒りを抑えきれなくなった時には，他人への慈愛，charityを思い出す。しかし，そのcharityでさえも，“prudent principle”であり，利己心から出た一種の安全装置であるとして次のように語られる。

“A New commandment give I unto you, that ye love one another.”  
 Yes, this it was that saved me. Aside from higher considerations, charity often operates as a vastly wise and prudent principle — a great safeguard to its possessor. . . . no man. . . ever committed a diabolical murder for sweet charity's sake. Mere self-interest, then, if no better motive can be enlisted, should, especially with high-tempered men, prompt all beings to charity and philanthropy. (p.36)

語り手は「危険な憤怒」(“dangerous indignation”) (p.14) に身をゆだねることもなく，ましてや自己を危険にさらしてまで他人を愛する自己犠牲的愛を持つこともなく，むしろ安全装置としてのcharityを持ち合わせるのみで，便宜主義的で「非常に安全な男」(“an eminently safe man”) (p.14) と言えるのである。

また，“in the cool tranquillity of a snug retreat”で金持ちのみを相手にぬくぬくと商売を営み，ジョン・ジェイコブ・アスターと共に，「詩的情熱」に欠ける語り手の姿は，*Israel Potter*で描かれるBenjamin Franklinの姿を髣髴とさせる。13の徳目を実行し巨大な富を築き，現世での成功を修めたBenjamin Franklinはその晩年をバリの社交界で優雅に過ごす。その生活ぶりは，やはり，“retreat” (p.48)と描かれ，さらに，次のように皮肉をもって描かれている。

Tranquillity was to him instead of it. This philosophical levity of tranquillity, so to speak, is shown in his easy variety of pursuits. . . the type and genius of his land. Franklin was everything but a poet. (p.48)

ここには、Benjamin Franklin に対する批判とともに、詩人としても文学者としても作品が売れず、アルコールに溺れ、妻に八つ当たりをし、“Dollars damn me” (p.191) と Nathaniel Hawthorne 宛の手紙に書き記した Melville 自身の怨念の気持ちも込められているように思われる。いずれにしても、語り手は、詩的情緒を持たず、危険な感情に身をゆだねることもなく、慎重に行動する安全な男である。そしてまた、*Pierre* のプリンリモンのパンフレットにおいて語られる “virtuous expediency” (美德の便宜主義) (p.214) を体現し、“horological” (p.214) な地上の時間を生きる俗物である。

### III

その語り手がバートルビーに示したものは、一つのセンチメンタリズムとその限界であった。当時、*Uncle Tom's Cabin* (1854) における従順な Tom や幼くして死ぬ Eva、*The Wide Wide World* (1850) における両親と別れて広い世界に投げ出される Ellen に読者の憐憫の涙が注がれ、こうした感傷小説、家庭小説がベスト・セラーであったことは周知の事実である。Melville もこのことを意識していたのか、語り手に次のように語らせる。

. . . if I pleased, could relate divers histories [of the law-copyists, or scribes], at which good-natured gentlemen might smile, and sentimental souls might weep. (p.13)

ここで “sentimental souls” が Ann Douglas が規定する当時の主なる読者層 “the middle-class sentimental-minded feminized reading public”<sup>8)</sup> と合致

することは確かである。短編“Bartleby”は、1853年、Putnam's 誌に掲載されている。保守的でセンチメンタルな Harper's 誌に対して Putnam's 誌は知的でリベラルな雑誌として知られる。<sup>9)</sup> 時代のセンチメンタルな傾向を十分に意識しながらも、それに必ずしも肯定的ではなかったメルヴィルの意図的な選択であったように思われる。

語り手の仕事の依頼を “I would prefer not to” と断るだけでなく、語り手の事務所を住処とし、日曜日までそこにいるバートルビーの孤独と貧困に、語り手は最初は同情し、“My first emotions had been those of pure melancholy and sincerest pity” (p.29) と述べる。しかし、こうしたセンチメンタルな感情もやがて「慎重な感情」にとってかわる。

... a prudential feeling began to steal over me. . . did that same melancholy merge into fear, that pity into repulsion. (p.29)

再び “prudence” が優先したのである。さらに、「常識」が憐れみの感情を取り去ると次のように語られている。

And when at last it is perceived that such pity cannot lead to effectual succor, common sense bids the soul be rid of it. . . it was his soul that suffered, and his soul I could not reach. (p.29)

バートルビーという一人の孤独で貧しい弱者に向けられた憐れみや共感といったセンチメンタルな感情は、結局相手を効果的に救うものではなく、また、相手の魂を真に理解するものでもなく、「慎重」や「常識」によって抑制されてしまうものなのである。これは Ann Douglas も指摘するように一つの幻想 (“sentimental illusion of brotherhood”)<sup>10)</sup> にすぎないのである。センチメンタルな感情が社会的に優位にある者が劣位にある者に対して抱く “condescending” な感情であることは否定出来まいが、尊大なバートルビー

はこれを受けることを拒む。書記としての仕事をしようとしなないバートルビーに語り手は理由を次のように尋ねる。

“Why, how now? what next?” exclaimed I, “do no more writing?”

“No more.”

“And what is the reason?”

“Do you not see the reason for yourself?” he indifferently replied.

(p.32)

このバートルビーの答えはセンチメンタルな共感を拒絶するものである。また、刑務所においての次のような語り手との会話においても同じことが言える。

“And see, it is not so sad a place as one might think. Look, there is the sky, and here is the grass.”

“I know where I am,” he replied. (p.43)

バートルビーにはしばしば感傷小説で描かれるような従順な弱者といったイメージはなく、むしろ“pallid haughtiness” (p.28) といった形容をされたり、その抵抗する様は、“passive resistance” (p.23) とまで語られる。

語り手のみならず、刑務所の差し入れ係りにまでバートルビーは憐れみをかけられる。

“I thought that friend of yours was a gentleman forger; they are always pale and genteel-like, them forgers. I can't help pity'em—can't help it, sir. Did you know Monroe Edwards?” (p.44)

そうした差し入れ係の憐れみを拒絶するかのようになり、バートルビーは差し出される食事を取ることを拒み続け、やがて死に至る。バートルビーの死は一つの



尊厳死であり、“passive resistance”の結末なのである。以上のようにセンチメンタリズムは語り手によってその限界が示され、バートルビーによって拒否されるのである。貧困や孤独のみならず、黒人や孤児その他社会的弱者に示されるセンチメンタリズムは所詮“condescending”な感情にすぎず、それによってなされる感傷的で生温いデモクラシーをメルヴィルは肯定しなかったのではないか。それゆえに、“ruthless democracy” (p.190)を提唱し、“a thief in jail is as honorable a personage as Gen. George Washington” (pp.190-191)とHawthorne宛の手紙に書き記したのではないだろうか。監獄の泥棒にもジョージ・ワシントンにも同じ名誉を与えられてよいと考え、両者に“equal eye”を向けたメルヴィルはこの作品において、社会的因襲に則って生きるConventionalな語り手にも反社会的でSubversiveなバートルビーにも平等の目を向けたのである。

#### IV

さて、物語は「私」なる語り手の視点で語られ、あくまで語り手のレンズをどうしてしか、「私」もバートルビーもその他の登場人物も分析することは出来ない。それ故、バートルビーは実在の人物ではなく語り手の想像力によって創られた分身であるという説もきわめて説得力のあるものである。例えば、Dan McCallは次のように述べている。“Bartleby is not really a person, he is a phantom crawling out of the unconscious dark pool of the narrator's repressed life.”<sup>11)</sup>

「慎重」という自己抑制を旨とし、社会の因習や秩序に則って生きる「私」の抑圧された部分が分身として現れ、それ故に語り手はバートルビーに“the bond of a common humanity” (p.28)や“A fraternal melancholy” (p.28)を感じたと考えるのは極めて自然である。そして、実際、両者は同じ性質を共有する。バートルビーはジョン・ジェイコブ・アスターが語り手の特質として2番目にあげた“method”の性質を持つのである。語り手がバートルビーの

机の引き出しの中をのぞく場面が次のように記されている。

... the desk is mine, and its contents too, so I will make bold to look within. Every thing was methodically arranged, the papers smoothly placed. The pigeon holes were deep, and removing the files of documents, I groped into their recesses. Presently I felt something there, and dragged it out. It was an old bandanna handkerchief, heavy and knotted. I opened it, and saw it was a savings' bank. (p.28)

物語をとうして、語り手の“method”を直接あらわす描写はない。むしろ語り手から貸し与えられた机の引き出しを“methodically”に整えているのはバトルビーの方なのである。そして、そこで彼が大事にしていたものは、なんと貯金箱であった。語り手も大事にしたであろう貯金箱、そして、“method”な性質と、語り手とバトルビーは相反するなかにも、共有するものを持っているのである。緑の衝立の向こう側で“dead wall reverie” (p.29)に耽るのはバトルビーでありながら、語り手でもあるといえよう。バトルビーが向かいながら夢想に耽る壁は“dead brick wall” (p.28)と描かれる。事務所の窓から見えるれんがの壁の色は黒である。しかし、“life”がなく「死」を想起させるのは白い壁の方である。もちろん、この“dead”は青白い顔をし、やがて死ぬ運命にあるバトルビーを修飾する転移修飾語であるとも考えられる。いずれにしても、その壁の色は「白」なのか「黒」なのか曖昧であり、一方の壁に向かいながら他方を夢想するといった具合である。バトルビーが語り手の想像力から創出された分身であろうと、実在の人物であろうと、両者が補完関係にあることには変わりなく、共有点を持ちながら反対のベクトルに延びる、いはば、一枚のコインの表と裏の関係にあるといえる。

また、バトルビーは社会に対して、“No”という人間である。家庭小説が流行し、家庭の幸福が賞揚されるなかにあって、不倫という反社会的行動を取ったヘスター・プリンを力強く見事に描き上げた Hawthorne に対して “He

says No! in thunder; . . . that is to say, the Ego” (p.186) と書簡に書き付けたメルヴィルであるが、そのメルヴィルが創り出した“No”という人間がバートルビーである。依頼される仕事を“No”と断り続け、事務所からの立ち退き命令にも“No”というバートルビーは「怠惰」(p.38)な「浮浪者」(p.38)であり、「不法侵入者」(p.39)である。しかし、“No”と叫ぶよりは社会の因習に則って生きる方がある意味で楽である。「人生の最も楽な生き方」を最上と考える語り手の裏返しをバートルビーが生きているといえよう。

## V

ここで、バートルビーについての考察を深めてみよう。沈黙ゆえに素性も正体もわからず、“unreasonable” (p.26) で “unaccountable” (p.27) な存在として描かれる。それゆえに、Ginger Nut は彼を “luny” (「気違い」) と呼ぶが、語り手はキリストのイメージを与える。例えば、彼の事務所への到来は “advent” (p.15) とキリストの降臨を思わせる。また、彼の事務所での仕事は “secular occupation” (p.27) とか “earthly to do” (p.32) と描かれ、まるで彼がこの地上の人間ではないかのようである。*Pierre* で語られる “chronometrical” な天上の時間を彼は生きていると言えよう。事務所を訪れたバートルビーは最初は精力的に働くが、「3日目」(p.20) に働くのをやめる。また、バートルビーは立ち退きを命じられて「3日間」考える。「3」という数字は三位一体を想起させ、また、キリストが復活するのに3日要したことなど、キリストとの連想が強い数字である。実際、バートルビーには復活の可能性さえ与えられており、彼の死は生のイメージを持って語られる。多くの批評家が指摘するように、彼が刑務所で死ぬ姿は胎児のようである。

Strangely huddled at the base of the wall his knees drawn up, and lying on his side, his head touching the cold stones, I saw the wasted Bartleby. (p.44)

“pale,” “pallid,” “cadaverous,” と物語をとうしてバトルビーを形容する語は絶えず死を連想させるものであり、彼が死を迎えるニューヨークの刑務所は皮肉にも “the Tombs” と呼ばれる。墓と子宮のイメージが重ね合わされており、‘the tomb’ が一字違いの ‘the womb’ となるのである。墓と子宮という生と死の融合のイメージは、バトルビーの死に際して語り手がつぶやく、“With Kings and counselors” (p.45) という言葉のなかにも見られる。これは、ヨブ記への言及であり、この世での不幸に耐えられなくなったヨブが母親の胎内で死ねばよかったと嘆く言葉である。ヨブ記には次のように記されている。

“Why did I not die at birth, come forth from the womb and expire?  
 . . . I should have slept; then I should have been at rest, with kings and counselors of the earth” (Job 3:11-14)

ここには生と死の融合のイメージだけでなく、死んではじめて人間は平等になるという、非常に冷酷な “ruthless democracy” を見る事が出来る。そして、死のみが人間を平等にするという次の *Pierre* の一節とも相通じるものがある。

There, beneath the sublime tester of the infinite sky, like emperors and kings, sleep, in grand state, the beggars and paupers of earth! I joy that Death is this Democrat; and hopeless of all other real and permanent democracies, still hug the thought, that though in life some heads are crowned with gold, and some bound round with thorns, yet chisel them how they will, headstones are all alike. (p.278)

ここで、“some bound round with thorns” は貧しい人々のことであるが、

茨の冠をかむるキリストが連想される。現世での地位や身分、そして成功を超越し、誤解され全人類の罪を背負って処刑されるキリストの死は生であり、人の子でありながら神の子であり、茨の冠をかむるキリストは壮大な中間地帯に存在するリミナルでデモクラティックな存在といえるのである。“liminality”という語はもともと Victor Turner が原始社会を論ずる際に用いたが、広く、either/or というよりは neither/nor, both/and といった “in-between” の状態を表す時に用いられる。その語源はラテン語の *limen* で “threshold” を意味し、具体的には、死、子宮、太陽や月の蝕、暗闇や荒野に例えられると Victor Turner は言う。<sup>12)</sup> とすれば、墓（死）と子宮（生）を同時に占有するバートルビーは極めてリミナルな存在と言わざるをえないのである。そして、バートルビーは “threshold” に立つ存在でもある。彼が事務所を訪れた時の次の描写はあまりにも印象的である。

In answer to my advertisement, a motionless young man one morning, stood upon my office threshold, the door being open, for it was summer. I can see that figure now—pallidly neat, pitiably respectable, incurably forlorn! It was Bartleby. (p.19)

以上のように白と黒の壁にはさまれた事務所で起こるこの物語は、聖と俗、天と地、美德と悪徳、社会性と反社会性、そして生と死といった矛盾が一枚のコインの表と裏のように、乖離しながらも融合する、いはば、リミナルでグレーゾーンの性格を持つのである。それは、語り手とバートルビーという二人の人物の乖離と融合であり、語り手自身、そして、バートルビー自身が内在的に持ち合わせる矛盾の一致である。中間色としての灰色はバートルビーの「灰色の目」(p.20) に象徴的に表されているように思われるが、ここで緑のシンボリズムを考えてみたい。

## VI

先に引用したように事務所から見える光景は「風景画家が“life”と呼ぶものに欠く。」この“life”はLeo Marxが指摘するように“green”であると考えられる。<sup>13)</sup> 実際、生を表す緑は*Pierre*において次のように描かれている。

Now in general nothing can be more significant of decay than the idea of corrosion; yet on the other hand, nothing can more vividly suggest luxuriance of life, than the idea of green as a color; for green is the peculiar signet of all-fertile Nature herself. (p.9)

しかし、同時に緑は古いものを腐食させる緑青の色でもある。このことが同じく*Pierre*に「民主主義の要素」であるとして次のように描かれる。

For indeed the democratic element operates as a subtile acid among us; forever producing new things by corroding the old; as in the south of France verdigris, the primitive material of one kind of green paint, is produced by grape-vinegar poured upon copper plates. (p.9)

生あるものは死に、死によって新しい生が誕生するのは自然界の法則であり、これこそ万物に平等に与えられた“ruthless democracy”であるとも言える。この新旧の交代こそ民主主義国家としてのアメリカの特質であるとさらに*Pierre*では次のように述べられている。

So that political institutions, which in other lands seem above all things intensely artificial, with America seem to possess the divine virtue of a natural law; for the most mighty of nature's laws is this, that out of

Death she brings Life. (p.9)

そして、窓からの景色としては見ることの出来ないこの緑をメルヴィルは事務所のなかに「緑の衝立」(“a high green folding screen”) (p.19) として置いたのである。緑の衝立は語り手の視野からバートルビーを遮るために置かれたものであるが、声は届く距離にあり、いはば“privacy” と “society” が結合したものである。(p.19) そしてこの衝立は語り手が事務所を出ていく時に、一番最後に取りのけられたものである。また、バートルビーの “the Tombs” での死に臨んで、その死を弔、再生を暗示するかのように緑の草が芽ぶく。

But a soft imprisoned turf grew under foot. The heart of the eternal pyramids, it seemed, wherein, by some strange magic, through the clefts, grass-seed, dropped by birds, had sprung. (p.44)

その草も年々はえ変わる。“The grass is annually changed” (p.9) と *Pierre* にも記される。ここで、バートルビー＝アメリカ＝民主主義という等式が成り立ち、それらを象徴する色が緑であるということが出来るのである。さらにそれはリミナルな中間地帯に構築される。“ever moving dawn” にメルヴィル文学の本質を見る John Bryant は “The Envious Isles” に見られる岸辺という陸と海の融合の場所に控え目な緑とリミナルなメタファーを見出し、そこを “repose” とその限界の領域としている。<sup>14)</sup> 次が詩の全引用である。

Through storms you reach them and from storms are free.

Afar descried, the foremost drear in hue,

But, nearer, green; and, on the marge, the sea

Makes thunder low and mist of rainbowed dew.

But, inland, where the sleep that folds the hills

A dreamier sleep, the trance of God, instills—  
On uplands hazed, in wandering airs aswoon,  
Slow-swaying palms salute love's cypress tree  
Adown in vale where pebbly runlets croon  
A song to lull all sorrow and all glee.

Sweet-fern and moss in many a glade are here,  
Where, strown in flocks, what cheek-flushed myriads lie  
Dimpling in dream—unconscious slumberers mere,  
While billows endless round the beaches die.

この詩において陸での穏やかな眠りとしての“repose”は岸辺という境界領域（リミナリティ）において海の大波や雷と緊張した接点を持つ。ビジネスの中心ウオール街の事務所であって、緑の衝立の向こうで仕事をせずに沈黙を保ち続けるバートルビー、緑の草の生えるニューヨークの刑務所“the Tombs”において眠るように死にゆくバートルビーはある意味において“repose”していたのである。しかし、それは衝立のこちら側と絶えず緊張した関係をもつ、張り詰めた休息“tense repose”であった。

#### 註

- 1) Herman Melville, “Bartleby, the Scrivener. A Story of Wall- Street,” *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860, The Northwestern-Newberry Edition* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and the Newberry Library, 1987), p.14. 以下、本稿における Herman Melville の作品及び、書簡からの引用はすべてこの版からであり、括弧内に頁数を示す。
- 2) Herman Melville, “Hawthorne and His Mosses,” *The Portable Melville*, edited by Jay Leyda (New York: The Viking Press, 1952), p.406.



- 3) John Bryant, "The Persistence of Melville: Representative Writer for a Multicultural Age," *Melville's Evermoving Dawn: Centennial Essays*, edited by John Bryant and Robert Milder (Kent, Ohio: The Kent State University Press, 1997), pp.10-11.
- 4) David S. Reynolds, *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville* (Cambridge: Harvard University Press, 1989), p.297.
- 5) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* (New York: The Modern Library, 1994), p.373.
- 6) Edgar Allan Poe, "The Business Man," *The Complete Works of Edgar Allan Poe*, edited by James A. Harrison (New York: AMS Press. Inc., 1965), Vol. IV, p.122.
- 7) Edgar Allan Poe, "Diddling Considered as One of the Exact Sciences," *Ibid.*, Vol. V, p.221.
- 8) Ann Douglas, *The Feminization of American Culture* (New York: Doubleday, 1977), p.309.
- 9) Sheila Post-Lauria, *Correspondent Colorings: Melville in the Marketplace* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1996), p.165, p.177.
- 10) Ann Douglas, *The Feminization of American Culture*, p.316.
- 11) Dan McCall, *The Silence of Bartleby* (Ithaca: Cornell University Press, 1989), p.103.
- 12) Victor Turner, *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure* (Ithaca: Cornell University Press, 1966), pp.94-95.
- 13) Leo Marx, "Melville's Parable of the Walls," *Bartleby the Inscrutable*, edited by Thomas Inge (Hamden, Archon Books, 1979), p.102.
- 14) John Bryant, *Melville & Repose: The Rhetoric of Humor in the American Renaissance* (New York: Oxford University Press, 1993), p.18.